

②空庭(2003年・京都市下京区)

「第2回京の町家学生設計コンペティション」の最優秀作品として建設された住宅。全面を格子で覆い、場所によってそのピッチを変えている。夜には照明の光が外部に漏れ、建物の外観に変化のある表情を与えている。

①『洛中洛外図』(17世紀・(財)林原美術館所蔵)

江戸初期の町家に見られる格子。街路に面した外壁の各所に、様々な寸法、形、色の格子が施されているのがわかる。

【京都絶対領域】

「京都らしい」建築を分かり易く構成する要素、庇・格子・坪庭などなど…。これらの要素を建築に採用することで、安易に「京都らしさ」を獲得した気になってはいないだろうか。あるいは逆に必要以上に忌避してはいないだろうか。そもそも格子とは何であろうか？ 京都の庇とはいかにあるべきか？ 京都だから…条例にあるから…という思考停止に陥る前に、これらの要素の意味と可能性を一つずつ、有名無名問わず具体的な建築を参照しながら、あらためて検討してみたい。

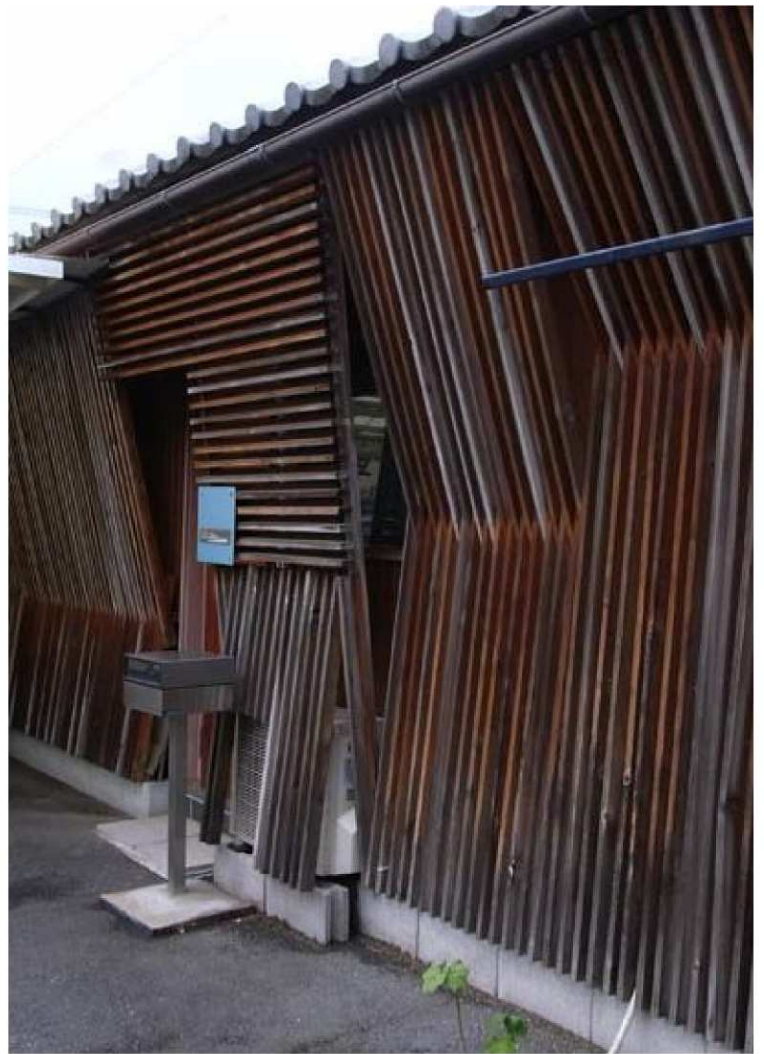
格子

京都絶対領域²





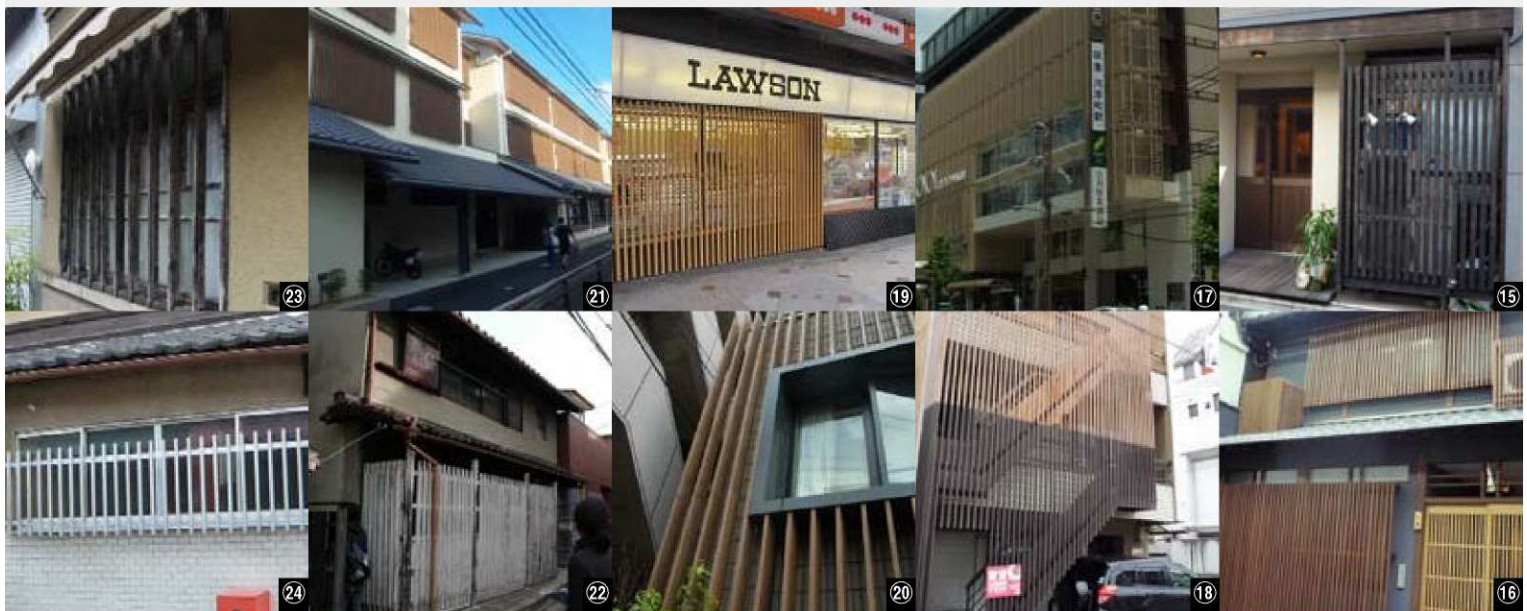
④グランブルー三条柳馬場(2002年・京都市中京区)
道路に面した外壁全面をセラミック製の格子で覆ったマンション。格子はバルコニーの手すりの機能も担っている。



③川端三条の格子外壁(不詳・京都市左京区)
元々単調な外壁だったところに、後付けで全面に格子を施したものの。外壁と格子の間に設備機器などを隠すと同時に、照明を仕込んで夜景にも配慮していた。近年、建物の老朽化のために取り壊された。

【格子】

「格子」とは本来は角材を縦横に組んだものを指していたが、時代と共に縦方向の部材を間をすかして並べた^{れんじ}連子^{れんじ}が、主に「格子」と呼ばれるようになった。格子は様々な機能を担うが、伝統的な京町家において裏に格子が設けられることがないように、京都の格子は街路に面しているのが大きな特徴である。本記事では、部材の縦・横・斜めを問わず、外壁面と街路との間に設えられた透過性のある面状の建築要素を「格子」と見なし、その様々な効果を検討したいと思う。



格子の歴史

京都の街ではあらゆる場所に格子がある。もとより格子は、家と通りとの関係を調整するという、京都の住文化を象徴する重要な存在ではあるが、京都のシンボルとしてかくも広く認知された建築要素は他に例を見ない。他の都市ではただの縦縞にしか見えないものが、京都では格子に見えてくる。このような格子と「京都イメージ」の結びつきは、やはり京町家に端を発する。では京都の町家はいつから格子を備えるようになったのか。

平安期の寝殿造では葦盤目状の棧に板を張った戸が格子と呼ばれていたが、棧の間が空隙となった開口部が町家に現れるのは室町期に入ってからである。桃山期の『洛中洛外図』を見ると、縦横に組まれた固定式の粗い組子が町家の標準仕様であったことがわかる。物騒な世情を背景とした防犯上の必要から、町家は格子を備えるようになったとされる。江戸初期になると、町家の窓はより細身で密な格子で覆われるようになる(①)。台鉋の普及により繊細な格子が製作可能となったこと、またそれが備える視線の制御効果が高密化する都市生活で有用であったことが、以後の格子の発達背景にある。この時期の町家は、格子の他にも下地窓や半円形の窓、カラフルな土壁などで彩られており、多様な意匠の混在を楽しむ風潮が伺われる。しかし江戸中期に入るとその風潮は次第に潜まり、町家の開口は目の細かい縦格子にほぼ統一される。以降幕末・明治に至るまで、町家意匠の画一化と並行して、格子の繊細化が進む。現在我々が抱く町家と格子のイメージはこの流れの延長にある。

江戸・明治の京町家が画一的であったと

例に、格子がバルコニーの手摺を兼ねたグランブルー三条柳馬場(④)がある。ここでは建物内共用部にまで格子が進入している。その向かいに建つマンション(⑤)でも、同じくバルコニー全面にFRPグレーチングが取り付けられている。伝統的な格子の現代的翻案であるが、その効果は前者ほど明快ではない。



京都に限らず日本中の住宅で散見されるのは、防犯機能に特化したいわゆる面格子である(②③、④)。面格子では、明るさを求め格子のピッチを広げたため、視線の制御機能は失われている。それとは逆に京都で近年増加しているのは、視線制御を突き詰めた、隠蔽のための格子である。隠されるのは室外機(⑤)や駐車スペース(⑧)、屋外階段(⑬)等の「好まざる」ものである。町家の下屋庇上の室外機を格子で覆った例(⑬)は市内に数多く見られるが、当初の町家とは脈絡のない場所にある格子は、かえって違和感をもって目立つ(信じ難いこと)に行政はこのような処置を推奨している。その点、川端三条にあった住宅(③)は秀逸である。ファサード全面の格子を斜めに組むことで生まれた僅かな隙間に室外機等を一式納めている。犬矢来が暴走したかのような独創的な格子は、伝統との連続性を一定保ちつつ、町家と現代住宅の双

えている。

格子を積極的にデザインに取り入れるのではなく、単に「京都だから格子」と言わんばかりのアリバイ的な格子利用は枚挙に暇がない。京都駅近くの小学校(②)もその一つである。その格子は(町家を意識したデザイン意図の明快さにもかかわらず)ある種の残念さを伴う違和感を漂わせている。街路から遠い二・三階の窓に格子があり、逆に一階には無いという、内外の緩衝装置としての格子の原型から大きく逸脱した使用法にも問題がある。また庇や壁面等の

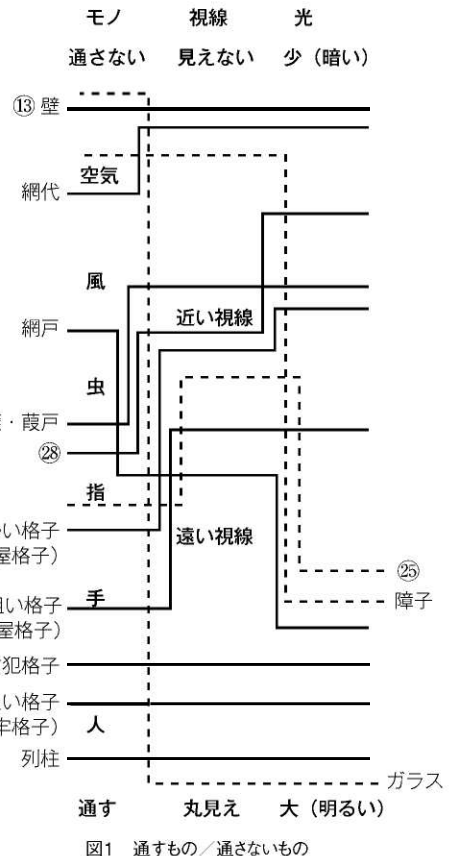


図1 通すもの/通さないもの

るいは採光・通風のため、街路側に大きな開口が欠かせない。その一方で、京都は往來と建物との距離が物理的に近く、防犯やプライバシーにも配慮がある。それゆえ京町家ではフィルター装置としての格子が細やかに発達したのである。

何を「通す/通さない」に注目して、格子や類似した要素を図式化すると図1のようになる。伝統的な格子は防犯と視線の制御に主眼があったのに対し、現代の格子は様々な特徴に特化されていることがわかる。

京都における格子

京都の景観条例では、格子の設置は一部の地域を除き義務付けられていない。それにもかかわらず自発的に格子が用いられるのは、前回取り上げた庇と対照的である。格子をつける建築が多いためか、京都では格子に関する法規的手続きがスムーズである。例えば、屋外階段に取付ける格子(⑬)には寸法とピッチに京都市独自の基準があ

はいえ、そこに様々な格子の様式があったことはよく知られている。町家のデザインには、間口や構造、町並みの思想など制約が実に多く、格子は自由度が比較的高い、数少ない箇所であった。他都市であれば屋根や外壁のデザインに注がれたであろうエネルギーが、京町家では格子に集中していたといえる。構造形式（出／台…）から組子の構成（連子／狐／親子…）、断面形状や見付・開口比（細目／小間返…）に至るまで、微細にわたる分類は格子に対する意識と洗練の高さを示している。米屋・糸屋・仕舞屋といった職種に応じて名付けられた格子は、これらの特徴を組み合わせた一種のデザインセットである。それは機能的要求（米屋は頑丈さ、糸屋は採光、仕舞屋はプライバシーを重視する等）への対応のみならず、家の格式や住み手の見栄、その家の社会的立場を町に向けて発信する、一種のサインでもあったと言えるよう。

現代における格子

京町家の格子の主たる機能は、通りと建物が接する境界にあるフィルターであり（後述）、社会的なサインでもあった。では現代・京都の建築においては、格子はどのような機能や役割を担っているだろうか。

まず目を引くのは、格子が開口部に留まらずファサード全体に拡張されたものだ。「京都イメージ」の獲得が意図されているのはいうまでもない。町家型住宅「空庭」⁽²⁾では、通りに面する外壁全面が格子となっており、ここでは視線制御と防犯に加え、日射の制御とアルミサッシという「好まざる」テクスチャの隠蔽の役割が格子に担わされていそうだ。また夜景の演出効果も期待されていよう。同様の全面格子の事

方から距離をとっている。

空間を囲い込む装置としての格子の利用も注目される。庇と複合的に用いられることが多い。下京のビル⁽¹⁰⁾では、格子を壁面から引き剥し庇の先端に並べることで、庇と格子に囲まれた実用的な緩衝空間を生んでいる。同様に上京の住宅⁽⁵⁾でも、格子を軒先に設けることで玄関前に軒下空間を確保している。格子の連続した街並み形成に寄与しつつ、玄関戸を開放した際に街路からの視線を制御する配慮が見られる。類似の事例が下京の住宅⁽²⁾であるが、こちらは獲得される空間の狭小さと閉鎖性ゆえ、空間的にも街並みへの影響の点でも好ましい効果を挙げているとは言い難い。

商業施設では実用的機能性の無い、純粹に「京都イメージ」喚起効果に特化した格子も少なくない。四条通のブランドショップ⁽¹³⁾の格子は、偏光フィルムのストライプに京都と当該ブランドのイメージを重ねあわせている。イメージ戦略という点でより純度が高いのは下京のホテル⁽²⁰⁾である。リノベーションにより既存のタイル貼外壁全面に木格子を貼付けながらも、丁寧に開口部だけは格子の設置を避けているのである。寺町通のカプセルホテル⁽²⁶⁾も同様に、開口の無い壁面に細長い窓業系部材を格子状に貼付け、単調なファサードに陰影を与



周囲とのバランス、格子自体のプロポーションなどにも起因しよう。この辺りが格子のデザインの肝であるように思われる。

やや変わった格子の事例として、町家由来の格子（簾？）がRC造でアレンジされた宮川町の歌舞練場⁽⁷⁾がある。東山の町家⁽⁷⁾の格子は、杉・松・松といった具合に組子一本一本の材種が異なる点が面白い。五条七本松のビル⁽¹⁴⁾は外壁のアルミ格子の間隔を微妙に変化させ表情を生んでいる。大徳寺付近の住宅⁽⁹⁾では、掘立柱状に地面から自立した鉄パイプ格子がアプローチを囲んでいる。祇園のビル⁽⁸⁾は格子の形状が縦や横にとどまらないことを示す。外壁を覆うパンチングメタルの開口サイズや配置を調整することで、視線・日射を制御しつつ花柄模様の特徴的なファサードをつくり出しているのである。



フィルターとしての格子

格子という装置は、風は通したいが視線は通したくない、風も視線も光も通したいが人は通っては困る、といった要求に応えて用いられる。好ましいものを通し、望まないものを通さない、というフィルター機能が、格子という建築要素の本質であろう。京都に多い饅の寝床状の敷地では、商売あ

り、煩雑な折衝が不要である。また非常用進入口の外側に格子扉を取り付けるという適否判断の分かれがちな設計も実現しやすい。近年、火災時の木格子がその内側の防火設備の性能を阻害しないことが実験により証明されたが、これも格子使用の追い風の一つだろう。

かくして京都では、歴史的・制度的に恵まれた環境の中、多様な格子が日々生み出されている。近世の町家で「不自由の中の自由」だった格子は今、素材も形状も限りなく自由である。そんな状況下において、何を拠り所に格子のあるべき姿を考えることができるだろうか。格子のフィルター機能は今なお有効性を保っている。安易なセットバックを避け、街との関係を積極的に構築するためにも、さらなる展開が期待される。空間を囲い込む格子はその一例であろう。京都のシンボルとしての利用も一概に否定したくない。しかし、京都の格子の歴史的蓄積に鑑み、現代の格子に少なからず欠けているのは、街に発する表情への細やかな配慮ではないか。組子の寸法や形状、壁面との面積比などの僅かな差が、雅な千本格子を殺伐とした牢格子に変える。格子が溢れる京都においてこそ、きめの細かい格子デザインが求められ、また、その差異を楽しむことができるだろう。

究建築研究室
柳沢 究

魚谷繁礼建築研究所
魚谷繁礼

池井健建築設計事務所
池井 健